

親鸞さま、なぜお念仏なの？ - 出会おう、語ろう、今ここで -

親鸞聖人のご生涯(5)

藤谷知道

東国への旅立ち

29歳で法然上人の弟子になり、35歳で流罪となつた親鸞聖人でしたが、建暦元年(一一二一年)流罪を赦免されました。越後に流罪になつてから4年と9ヶ月が経つていました。聖人一家の喜びや、いかばかりであつたことでしょうか。ところが、聖人は京に帰らず、なお越後にとどまつたのです。しかも、3年後に、越後を離れて向かつた先は、京を遠く離れた東国でした。なぜ東国を選ばれたのでしょうか。それについて、『顕淨土眞実教行証文類』を書きあげるためという説や、善光寺の念仏聖たちと一緒に東国へ行つたという説があります。あるいは、東国には法然上人に帰依する御家人たちがたくさんいて、彼らが聖人一家を招聘したことも考えられます。また、聖人にとつても、

東国は新しい文化の胎動しているフロンティアとして魅力的な新天地であつたのかも知れません。

僧伽の成立

僧伽の成立
 児玉暁 洋先生が「仏法僧」の三宝について、「仏」は真理の人格的表現、「法」は真理の言語的表現、「僧」は真理の社会的表現であると教えてくれました。仏・法・僧の三宝を貫いているのは「真理」です。真理は真理にとどまらず、おのずから言葉となり、人となり、社会となつて、その相を現し、それによつて「真理」が「眞実」となると教えて下さいました。

親鸞聖人の場合は、どうでしょうか。法難と流罪を通して「愚禿親鸞」と名告るようになりしました。「愚禿親鸞」は「眞理」が人と現れた相です。だから、あたかも鉄が磁石に吸い寄せられるように、人々が聖人に引き寄せられ、そこに僧伽が生まれました。

初期眞宗教団

『御伝鈔』にはその様子を「聖人、越後国より常陸国に越えて、笠間郡稲田郷という所に隠居したまう。幽栖を占むといえども、道俗跡をたずね、蓬戸を閉ずといえども、貴賤衢に溢る」と伝えていきます。

『親鸞聖人門弟交名牒』

『親鸞聖人門弟交名牒』には下野国(栃木県)に眞仏以下7名、常陸国(茨城県)に順信以下20名、下総国(千葉県)に性信以下3名、奥羽两国(現在の東北地方)に如信以下7名、武蔵国(東京都)に西念1名で、東国から奥羽にかけて38名の名が出ています。稲田を中心に、東国から奥羽までの広い範囲にわたつて布教したようです。

御同朋・御同行

『唯信鈔文意』という親鸞聖人のお書物に、「りよし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」というお言葉がでてきます。

聖人在世の時代においては「りよし・あき人、さまざまのものは価値のない「下類」であり「いし・かわら・つぶて」扱いされてい

ました。そうした人々と聖人の間には距離がありません。「われら」という言い方は、聖人が人々と同座していたことを示しています。

聖人は「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」「歎異抄」とも言われました。蓮如上人はこうした親鸞聖人の姿勢を、「聖人は御同朋・御同行とこそ、かきずきておせられけり」「御文」と述べておられます。聖人の生きられた世界は、如来の前に平等にひろがる「同朋」の世界でした。

日本最初の平等社会

親鸞聖人の僧伽は日本ではじめて実現した平等社会でした。士農工商の身分制度の撤廃(明治政府)や婦人参政権の獲得(戦後憲法)などがごく最近のことだったことを思えば、いかに革命的であつたかわか

ると思えます。

後に蓮如上人の時代になつて、武士の支配に対し一向一揆をおこし、ついには加賀を「百姓のもちたる国」とすることができたのも、親鸞聖人の開かれた「御同朋御同行」の精神から来ている、と言え

浄土を生きる

同じように阿弥陀如来の浄土に生まれることを願いながらも、時宗や浄土宗にはない「御同朋・御同行」の僧伽から湧き出てきたのでしょうか。それは聖人の信心が、自力無効の自覚に立つ徹底した他力主義であり、遠くはるかに極楽浄土を夢見る未来往生の考えを超えて、ただ今より浄土を念じながら生活していく現生(正定聚)主義であつたからだと思えます。東国に生まれた念仏の僧伽は、聖人の教えの眞実なることを証するものだったのでした。

念仏生活を妙好人に学ぶ(8)
五十嵐 務さん



藤谷 純子

五十嵐さんの本籍は新潟県で、呉服商をしているお家ですが、大正十一年六月十五日に朝鮮の釜山で生まれました。お母さんが熱心にお寺参りをしていたと聞きました。五十嵐さんが仏法を聞き始めたのは、弟さんが、熊本の高等工業の寮で自殺をしたことが縁だったそうです。五十嵐さん二十五歳の時でした。その頃は、別府で観光客相手にお土産店を営んでいました。とにかくいい品を売って喜んで貰おうと、一生懸命に働いたそうです。

今度別府に見えるからぜひ聞きに行きなさいと勧められ、フツとその気になって出かけた時に、「人間は、みんな地獄に堕ちる。しかし地獄の一番下で、如来さまが手を広げて待っていてくださる」と言われたそうです。今までは、仏法を聞いていけばだんだん上へ上へと上っていったら極楽に往けると思っていたのと百八十度違っていたのにびっくりしたけれども、「これから、この先生のお話を聞いていこう」と決心したそうです。

五十嵐さんは若いときからの念願であった「仏法をきちんと聞きたい」という夢を、仕事にけりを付けて、六十六歳の時に実現することになりました。お同行の方のお餞別を十万円持って、東京大谷専修学院に入学しました。新聞配達の仕事ですれば住まいも奨学金もいただけたのです。学院卒業後はお寺の役僧をして、平成三年秋より四日市東別院の法務員としてやって来られたのです。五十嵐さんのお勧めで、勝福寺に正遠先生ご夫妻がおいで下さるようになって

りました。当時正遠先生は九十歳位だったと思います。病後だったので奥様の利枝先生が付き添ってこられました。別院を辞めてからご自身が入院することも度々でしたが、奥さんに認知症の症状が出て、少しずつ進行していることも苦悩の種でした。病院へお見舞いしたときに、五十嵐さんはベットの机に座って、出雲路晚寂先生の本を開いて聞法しておられました。そのことを二〇〇九年の百日聴聞会のご法話で、次のようにお話し下さいました

~~~~~

**父を憶う**  
後藤 法子

父は私にいろいろなことを教えてくれました。特に一杯入ると、説教が始まりました。「全てが諸行無常なのだよ」「全てが仏様のお運びだよ」「始めはマネでいいからお念仏申すんだよ」「仏様の光は毛穴から入ってくる」「どんな悪党でも、阿弥陀様は救って下さる」。私は「また始まった」と右から左に聞いてました。しかし有り難いことに、困ったことが起こると父の言葉が浮かんで来てくれます。病院のベットで見送った時も「これでやっと正遠先生や友人や家族に会えるね。よかつたね、お父さん」という気持ちでした。父は帰るところまで見つけて、とても密度の濃い一生を送ったと思います。  
(追悼文集より・抜粋)

第十回 (知道・純子最終回)  
親鸞聖人のご生涯(7)  
藤谷 知道  
恵信尼さま  
藤谷 純子

\*親鸞聖人のご命日の**11月28日**午後1時半〜に変更